

# Best poster AWARD を頂いて(学会報告記)

今治市医師会 鴨川 淳二

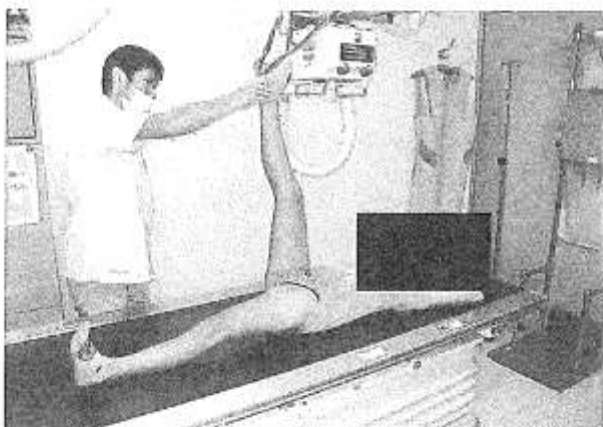
<sup>3rd</sup>Spine Radiology 2013(ASSR: American Society of Spine Radiology と ESNR: European Society of Neuroradiology の合同

国際会議)が昨年7月5日から3日間、ミラノ(伊)で開催された。私は研究成果をポスターにまとめて参加し、図らずもベストポスター賞に選出された。受賞研究は「思春期アスリートの腰痛とハムストリング・タイトネスの関係」(Tight hamstrings of young athlete change lumbar spinal alignment kyphoscoliosis in the kick position : a novel radiographic evaluation

for lumbar spine in anteroposterior and lateral view under dynamic straight leg raising) である。

通常の脊椎外科診療では、腰椎の単純レントゲン機能撮影は前後屈（立位）での動的評価を行う。私は以前より、この撮影だけでは不十分と考えていた。即ち従来の撮影方法は、下肢と骨盤の運動を無視した腰椎のみの評価であったからだ。私の疑問は「一步一步、足を交互に歩行する時、腰椎はどのような動きを示すのか。」少し具体的に言えば、「サッカーのキックの姿勢（片足の振り上げ動作）では腰椎はどのような動きを示すのか。」という問いである。しかもこれが、「下肢筋のタイトネスによって、どのように変化するか。」ということが最大の関心事であった。

無論、片足を振り上げる姿勢は不安定で、撮影時の再現性が無い。よって仰臥位 SLR 姿勢でこれを代用させ、腰椎アライメントの変化を単純レントゲン写真（正面および側面）で確認した（写真）。ハムストリングス・タイトネスがある場合は SLR 90° の時点で有意に、腰椎は回旋を



レントゲン撮影姿勢

伴って後側彎変形を来たすことが判明した。男女の特性も判った。詳細は割愛するが、この結果は外来診療における学生アスリートのストレッチ指導に役立っている。

本学会のトピックは①脊椎圧迫骨折の治療 (Augmentation) と②脊椎転移癌の画像診断であった。また今後 EUROSPINE (欧州 spine surgery の学会) との協力で、放射線科と脊椎外科が如何に協力して、若手医師の教育を行うかが熱心に議論されており、私もそれを傾聴した。私以外、日本からの参加は無かったようだ。本邦でも脊椎放射線学の議論がもっとなされるべきではないかと懸念した。



Duomo of Milan

私は脊椎外科とスポーツ腰痛の2つの sub-speciality を軸に、日々臨床を行っている。日常診療では、「問診と画像診断のシステム化」が特に重要と考えている。他覚的な診察は医師個人の技量に依存するが、これらは特殊技能を有す Co-medical との協力や連携が大切な分野であるからだ。客観的であり、再現性や信頼性も高い。

特に画像診断は「一目瞭然で理解できる

もの]を作り出すことに日々精進している。病態の把握・共有，患者教育という観点からも画像診断学の進歩は極めて重要である。今回の研究の，片側下肢挙上下でのレントゲン撮影は，下肢・骨盤・腰椎の繋がる連動運動を理解できる新しい撮像方法として評価を頂けた。

さて，国際学会に参加する度に感じることもある。一つは，議論が長く熱心であることだ。日本の場合，感情移入し過ぎたり，体裁を取り繕う質疑応答をよくみかける。既存の概念や思い込みから抜け出ることがいかに大切かを思い知らされる。本会は，科の枠を越えたヘテロの集まりで議論も白熱していた（写真）。

二つ目は自国語が英語ではない EU 圏の



会場にて

医師でも英語が流暢なことだ。かく言う私も英会話が不得手であり，もっと勉強しておけば後悔の念にさいなまれる。日本人は英語がしゃべれないから…とって質問されない事も多いと聞く。今回の学会も3日目になると英語での議論のストレスで精神的な抑制がかかり，声が出なくなりました。困ったもので，いつもこの様な調子である。情けなくも思う。

本受賞は今後の研究の励みにもなった。思春期アスリートの腰椎分離症発症メカニズムは未知の部分が多い。よって治療法も確立していない。思春期の腰痛を減らすために，まだまだやるべきことは多い。

ミラノでの学会を済ませた後は，ベニスまで足をのぼした。ジュゼッペ・ヴェルデイの「オテロ」を観劇し，短い休みを過ごして旅を終わらせた。一人旅のこともあり一度も日本語で会話する場面が無かった。旅の後半には少しだけ伊語の音が聞きやすくなっていた気がする。

帰国後，職場同僚の羽藤泰三医師やスタッフが満面の笑顔で，受賞を心から喜んでくれたことが何より嬉しかった。彼らの協力なくしては，この受賞はあり得なかったからだ。